

SSF SPORT POLICY RESEARCH

スポーツ ポリシー リサーチ

VOL.14



CONTENTS

研究レポート1

4～9歳 / 10代のスポーツライフに関する調査報告書 2015

1. 運動・スポーツ実施頻度
2. 運動・スポーツ実施種目
3. メディアの利用状況 (青少年)

研究レポート2

2015年度笹川スポーツ研究助成採択研究
障害児における健康教育を取り入れた運動・
スポーツ推進のための基礎研究

笹川スポーツ財団は、国民が生涯を通じて
それぞれが望むかたちでスポーツを楽しみ
幸福を感じられる社会
「スポーツ・フォー・エブリワン」の実現を
ミッションに掲げるスポーツ専門の
シンクタンクです。

研究レポート2

2015年度笹川スポーツ研究助成採択研究 障害児における健康教育を取り入れた 運動・スポーツ推進のための基礎研究

塩田 琴美氏 (早稲田大学スポーツ科学学術院 講師)
徳井 亜加根氏 (共同研究者 国立障害者リハビリテーションセンター学院義肢装具学科)

■ 調査目的

本研究は、①障害児におけるレクリエーション・スポーツ実施の実態および現状の課題について明らかにすること、②レクリエーション・スポーツ推進のための健康教育を取り入れたブックレットの開発・作成を行うことを目的として行った。

【調査対象】 本研究に協力の得られた公立の特別支援学校5校
(肢体不自由、聴覚障害、視覚障害、知的障害)を介した、
特別支援学校に通学する児童・生徒の保護者860名とした。

【回答者数】 208名から回答が得られ、そのうちデータの欠損がある
5名を除外し、有効回答数203名を分析対象とした。

【児童・生徒の障害特性】
肢体不自由が59.6%、知的障害58.1%、
発達障害20.2%、視覚障害15.3%、聴覚障害16.7%、
精神障害2.5%。そのうち、2つ以上の重複障害を有する
児童・生徒が51.2%であった。

■ 主な調査項目

回答者および児童・生徒の属性、レクリエーション・スポーツの実施の有無と実施内容に関する項目、実施にあたっての促進・阻害因子に関する項目、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに対する意識・行動変化など。

調査結果のポイント

- ①レクリエーション・スポーツの過去1年間の実施については、「はい」45.3%、「いいえ」54.7%となった。平均的な活動頻度は月1～3回、週1～2回がともに31.1%で最も多かった。
- ②実施にあたり負担となっていることは、「障害に適したものが少ない」(22.2%)、「家族の負担が大きい」(15.7%)の項目が上位にあがった。
- ③レクリエーション・スポーツの参加促進の支援について、情報提供や支援を受けたことがない割合は学校(30.8%)、病

- 院(95.4%)、自治体(66.5%)であった。
- ④地域におけるスポーツ特化型の活動について、「今後、利用をしたい」が77.8%を示した。
- ⑤2020年の東京オリンピック・パラリンピック招致決定に対する意識については、「興味がない」が75.5%であった。また、パラリンピックに関する情報入手や観戦行動などの行動変化については「変わっていない」が93.6%であった。

調査結果のまとめ

本調査の結果では障害を有した児童・生徒のレクリエーション・スポーツの実施率は低いことが示された。その背景には、家族の負担や障害の特性に応じたレクリエーション・スポーツのサポート体制の不足があげられた。また、東京オリンピック・パラリンピック招致決定以降においても、一般地域レベルでの障害児童・生徒を取り巻くスポーツ環境は変化がない事が示唆された。しかし、障害児においても、レクリエーション・スポーツを実施することは、心身の発達に良い影響をもたらすと考えられる。そのためには、公的機関の連携やニーズに合わせたサポートシステムの構築が望まれる。

TOPICS

住民総参加型のスポーツイベント
チャレンジデー2016
2016年5月25日(水)
全国130カ所
68市49町13村で一斉開催

お問い合わせ先[メール]: cday@ssf.or.jp (チャレンジデー担当)

笹川スポーツ研究助成2016

今年度、優れた「人文・社会科学領域」の研究37件(一般19件、奨励18件)を支援しています

○研究のテーマ等はウェブサイトをご覧ください

スポーツ専門ライブラリ 学遊館

スポーツ関連の書籍・雑誌・調査報告書など約6,300冊を所蔵
ウェブサイトから蔵書の検索もできます

○開館日時 / 月曜日～金曜日
(土・日・祝は休館) 9:00～17:00

■調査結果、お問い合わせはこちら

ウェブサイト **www.ssf.or.jp**

電話 **03-5545-3303**



研究レポート1

4～9歳／10代のスポーツライフに関する調査報告書2015

笹川スポーツ財団では、『子どものスポーツライフ・データ』(4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書)、『青少年のスポーツライフ・データ』(10代のスポーツライフに関する調査報告書)を取りまとめた。当財団では、10代の青少年を対象にした本調査を2001年から、4～9歳を対象にした本調査を2009年から実施。これにより、全国の幼児から青少年までの連続した年代の「実施頻度」、「実施時間」や「運動強度」から見た「運動・スポーツ実施レベル」をはじめ、スポーツ施設やスポーツボランティア、好きなスポーツ選手などのスポーツライフの現状を継続的に把握することが可能となった。

調査結果

1 運動・スポーツ実施頻度

わが国の子ども・青少年はどれくらい運動・スポーツを行っているのだろうか。

図1・図2に4～9歳・10代の運動・スポーツ実施頻度・レベルを示した。4～9歳では、高頻度群(週7回以上)が49.8%で最も多く、次いで中頻度群30.5%(週3回以上週7回未満)、低頻度群(年1回以上週3回未満)16.0%、非実施群3.7%であった。

10代では、この1年間にまったく運動・スポーツを行わなかった「レベル0」が13.2%、週1回未満「レベル1」11.5%、週1回以上週5回未満「レベル2」22.4%、週5回以上「レベル3」25.8%、週5回以上でかつ1回120分以上、運動強度「ややきつい」以上の「レベル4」27.1%だった。

2 運動・スポーツ実施種目

過去1年間に「よく行った(実施頻度の高い)」運動・スポーツ種目をみると4～9歳の男子では、「おにごっこ」が50.9%で1位であり、「サッカー」が45.5%で2位、「水泳(スイミング)」37.3%と続いた。女子では男子同様「おにごっこ」が50.0%で1位であり、次いで「ぶらんこ」39.4%、「自転車あそび」37.5%、「なわとび(長なわとびを含む)」33.4%であった。

10代の男子では1位が「サッカー」44.0%であり、他の種目と比べて実施率が突出している。次いで「バスケットボール」27.3%、「野球」23.0%となった。女子では1位「バドミントン」24.5%、次いで「おにごっこ」23.5%、「バレーボール」20.8%となった。

図1:子ども[4～9歳] 運動・スポーツ実施頻度群(n=1,123)

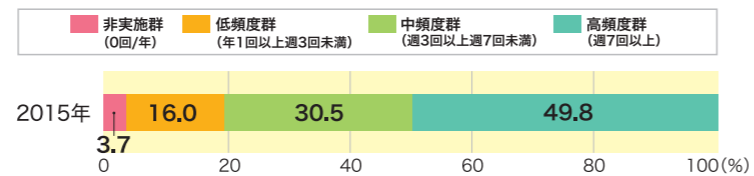


図2:青少年[10代] 運動・スポーツ実施レベル(n=1,712)

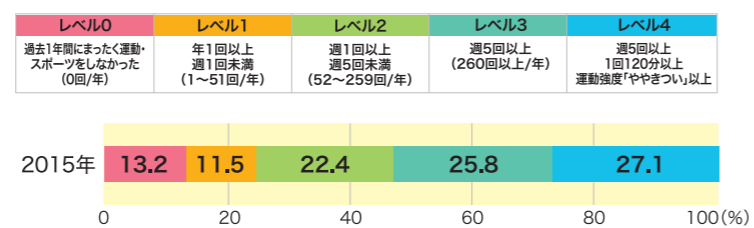


表:過去1年間に「よく行った」運動・スポーツ(上位5種目) 複数回答

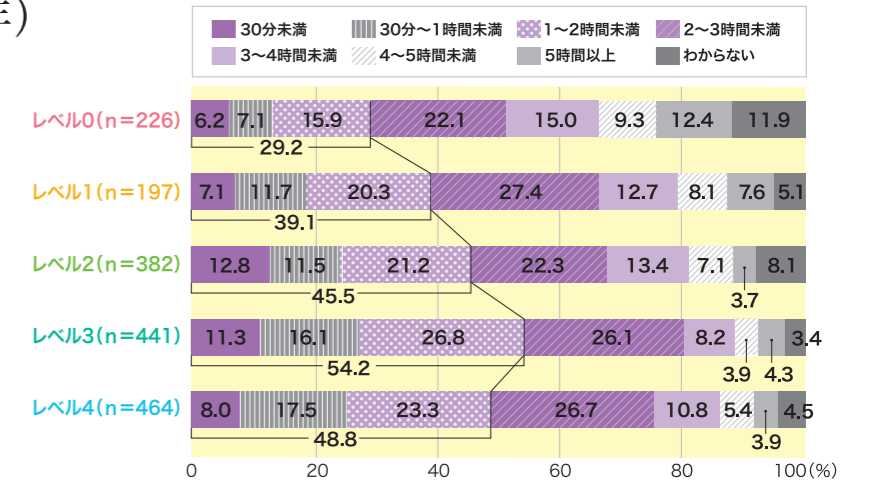
	子ども [4～9歳]			青少年 [10代]		
	順位	実施種目	実施率 (%)	順位	実施種目	実施率 (%)
男子 (BOYS)	1	おにごっこ	50.9	1	サッカー	44.0
	2	サッカー	45.5	2	バスケットボール	27.3
	3	水泳(スイミング)	37.3	3	野球	23.0
	4	自転車あそび	35.9	4	ジョギング・ランニング	17.7
	5	ドッジボール	32.4	4	ドッジボール	17.7
女子 (GIRLS)	1	おにごっこ	50.0	1	バドミントン	24.5
	2	ぶらんこ	39.4	2	おにごっこ	23.5
	3	自転車あそび	37.5	3	バレーボール	20.8
	4	なわとび(長なわとびを含む)	33.4	4	バスケットボール	19.1
	5	水泳(スイミング)	30.6	5	ジョギング・ランニング	17.4

※「よく行った」運動・スポーツ・種目:過去1年間に行った運動・スポーツのうち、実施回数の多い種目。

3 メディアの利用状況(青少年)

平日と休日における学校の授業や仕事以外でのテレビ視聴やパソコン、ゲーム、スマートフォンなどの1日あたりのメディアの利用状況(平日2時間未満)と「運動・スポーツ実施レベル」をみると、「レベル0」が29.2%、「レベル1」が39.1%、「レベル2」が45.5%、「レベル3」が54.2%、「レベル4」が48.8%となり、運動・スポーツ実施のレベルが低いほどメディアの利用時間が長い状況がうかがえる。

図3:メディアの利用状況(レベル別)



※学校の授業や仕事以外のテレビ・ビデオ・DVDの視聴、パソコン、ゲーム(テレビ、パソコン、携帯型のゲーム機、携帯電話のゲーム、自宅・友人宅・ゲームセンターでのゲームを含む)、スマートフォンを含む1日あたりの利用時間。

調査結果のポイント

1 運動・スポーツ実施頻度

4～9歳の運動・スポーツ実施頻度をみると、49.8%とおおよ半数が高頻度(週7回以上)でからだを動かしていることがわかった。一方で、非実施者も3.7%と2013年調査(1.7%)から増加しており、引き続き注視が必要である。10代の青少年の実施頻度をみると、非実施者が13.2%、「レベル4」が27.1%であった。非実施者は7～8人に1人(2013年調査13.0%)、「レベル4」は3～4人に1人程度(2013年調査26.2%)で推移しており、大きな変化はみられない。



笹川スポーツ財団
スポーツ政策研究所 研究員
藤原直幸

2 運動・スポーツ実施種目

4～9歳の過去1年間に「よく行った(実施頻度の高い)運動・スポーツ種目を性別にみると、男子では、「おにごっこ」が50.9%で1位であり、「サッカー」が45.5%で2位、「水泳(スイミング)」が37.3%で3位と続いた。同様に10代の青少年における過去1年間に「よく行った」運動・スポーツ種目を性別にみると、男子は「サッカー」が44.0%で1位、「バスケットボール」が27.3%で2位、「野球」が23.0%で3位となり、「野球」が調査開始以来初めて3位となった。10代における「サッカー」と「野球」の差は年々開いており、4～9歳から実施率が高い「サッカー」との違いが10代以降に影響していると考えられる。つまり、4～9歳の時点でスポーツに触れる経験がその後の実施率に重要と示唆される。

3 メディアの利用状況

運動・スポーツ実施レベルが低いほどメディア(テレビ、PC、ゲーム等)の利用時間(=スクリーンタイム)が長いとの結果になり、運動・スポーツの実施状況とスクリーンタイムは反比例することが明らかとなった。ただし、今回の調査ではどのようなコンテンツを閲覧しているかといったスクリーンタイムの内容についてはたずねていない。勉強や親・友人とのコミュニケーションのツールとして活用しているケースも考えられるため、今後はメディアの種類やコンテンツの内容なども加味した調査が必要となるであろう。

調査報告書概要

Amazon ブックストアよりお求めいただけます

4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書 子どものスポーツライフ・データ2015

調査対象
母集団:全国の市区町村に在住する4～9歳(2005年4月2日から2011年4月1日までに生まれた人)
標本数:1,800人
地点数:市部181地点、郡部19地点、計200地点



2016年2月29日発売 A4判/168ページ
2,000円+消費税

10代のスポーツライフに関する調査報告書 青少年のスポーツライフ・データ2015

調査対象
母集団:全国の市町村に在住する10歳代(10歳～19歳)(1995年4月2日から2005年4月1日までに生まれた人)



標本数:3,000人
地点数:市部181地点、郡部19地点、計200地点

2016年2月29日発売 A4判/200ページ
2,000円+消費税